

＝ 持続可能性を信じて ＝

6月16日に同期入社の面々が同期会を開くと云う。残念ながら業務の関係で出席はかなわないが、風貌の変わった友たちが遠い昔に戻って、ワイワイ・ガヤガヤ飲み・語る姿を一人想像し「にやにや」している。

ところで、基幹労連は「65歳現役社会の実現」に向け、数度にわたるアンケート調査も踏まえ、前期1年をかけ個別課題の洗い出しやあるべき姿の検討を重ねてきた。組織全体の合意を得てAP18春季取り組みの要求項目として掲げ、各労使の真摯な議論の結果、制度づくりに向けた検討がスタートする。

この取り組みは、単なる年金受給開始年齢の引き上げのみならず、超少子高齢社会を迎えあらゆる領域において多様な人材の活躍が求められていることや、基幹労連の各産業・企業において技術・技能の伝承を継続していくためには、女性や高齢者も含めた優秀な人材の確保と活躍が必須の課題としての取り組みである。

65歳現役社会の実現とは、18歳～65歳まで年齢・性別に関わりなく現役として如何にして生き活きと働き続けるのか、また、将来不安を無くし、雇用と生活の安心・安定の形を見せることがモチベーションを維持し、産業・企業の発展につながるという目的をかなえることにある。

そのことを真の意味で実現していくためには、労働環境の構築とともに、働く側の意識改革も重要である。「私は、俺は、まだまだやる・やれる」その姿勢が大切であり、後輩達の元気にも繋がるはず。加齢は誰しもの行く道・来る道、その道しるべとなる形をつくりあげていかなければならない。もとより、その実現のために、産業・企業の持続的発展が必要不可欠ということは言うまでもない。

持続という意味合いで紹介すれば、2015年9月の国連サミットで、2016年～2030年の15年間で達成するために掲げた「SDGs」(エスディーゼーズ; Sustainable Development Goals)、持続可能な開発目標が採択された。これには差別や貧困をなくし、働きがいと経済成長の持続等に向けた17の目標が示されている。(是非、ネットで検索してほしい)

だが、あらゆる取り組みにおいて持続可能性を追求していく上で、決して忘れてはならないことは、「人」を真ん中に置くということである。今国会で、働き方改革関連法案が議論されているが、働く者の健康と安全を守り、家族の幸せを築くためには、幾度となく繰り返されてきた過労死を無くし、長時間労働を是正し、人間らしく生き活きと働くルール作りこそが重要である。持続可能な経済・社会、産業・企業の真ん中には常に「人」、このことを忘れてはならない。

そして、私たち個々人の持続可能性には、年齢、健康、働き方、生活、物事の捉え方等々、目標を持って変化への対応力を身につけることも大切である。

自らの持続可能性を信じて、私の座右の銘?は「Now For Tomorrow: 明日のために今!」

基幹労連に関わる多くの仲間と冒頭に触れた還暦間近の友たちと、その家族の幸せがず～っと続くように、互いに笑顔を保ちながら努力していこう。

ご安全に

2018年6月6日
日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一